
VOL

3.29 2008 No.01

ANTI G8 MOVEMENT Issue

Sixteen pages

CONTENTS

G8対抗運動

——新たなる世界政体との闘争

平沢 剛・高祖岩三郎

運動から社会へ

マッシモ・デ・アンジェリス

From Movement To Society

Massimo De Angelis

酒井隆史・後藤愛由美 訳

Anti-G8 Movement A New Struggle Against the Global Governance

G8 対抗運動

——新たな世界政体との闘争

平沢 剛・高祖岩三郎

G8サミット(先進国首脳会議)が、2008年7月7日から9日まで、北海道・洞爺湖で行われる。G8サミットとは、アメリカ、イギリス、イタリア、ドイツ、フランス、カナダ、日本、ロシアの主要8ヶ国が、年に一度、各国の持ちまわりで開催する首脳会合のことである。1975年、石油ショックを受けた世界的な経済危機を先進列強諸国主導で共同管理するために、まずG6サミットとして生まれ、翌年にカナダも加わり、1998年からは資本主義化したロシアも含めて現在の機関になった。その会合では、当初から経済のグローバル化のもとで先進資本主義諸国の利益を共同管理することを目途に運営がなされてきた。1980年代に入ると冷戦下における安全保障問題など、広く国際政治の問題が取り上げられるようになり、冷戦崩壊後は、「環境問題」「債務問題」「テロ対策」などのテーマについても議論されるようになっていく。

私たちは、このG8サミットの開催に強く抗議し、理論的かつ実践的にこれに対抗する用意がある。私たちは言うまでもなくG8が存在することそのものに断固反対である。私たちがそうした立場を取るには、様々な理由がある。

まず最初に指摘できるのが、その「非民主的」としか呼びようのない体制である。そもそも、G8に参加する国々は、世界人口の14%を占めているに過ぎない。そのうえ国際法や国際連盟などから、政策決定の権限を委任されているわけでもない。主要8ヶ国の首脳、閣僚、官僚による非公開の私的会合にすぎないのである。しかし、にもかかわらず、G8はグローバル経済や世界政治の政策決定過程に、圧倒的な富を背景に甚大な影響力を行使している。例えば、G8だけで、全世界の国民総生産の約3分の2、地球上の二酸化炭素の排出量の50%近く、武器輸出の90%、軍事支出の60%を占めている。また、IMFや世界銀行といった超国家的機関については、投票権の約半分を有している。

もう一つは、G8がネオリベラリズムを積極的に押し進めていることである。「ネオリベラリズム」とは、「市場の自由化」「貿易の自由化」が、人々の富を最大化させるとするイデオロギーである。G8は、自国の政策や、IMFや世界銀行、WTOなどの超国家的機関を通じて、この理論を実行に移してきた。しかし、その結果としてもたらされたのは、豊かで平等な社会どころか世界の人々の生活と生命を脅かす貧困と破壊であり、「構造調整」や「テロとの闘い」を通じた監視社会、権威主義的治安国家化である。

G8に反対すること、それは1994年のサパティスタの武装蜂起、99年シアトルの反WTO、01年ジェノバの反G8運動以降のグローバル・ジャスティス・ムーブメントの時代において、世界を思考するための大前提である。「G8とは何か」、「なぜG8に反対するのか」について議論することには大きな意味があるが、私たちにより強く求められているのは、いかにそれに反対する理論を構築するか、いかにそれを実践に移して行くか、といったことなのである。

もちろん、一方で「サミットホッピング」という呼称に象徴されるように、超国家機関によって主催される会合を渡り歩き、直接抗議することに対して、日常に根ざしたローカルな運動の側が距離を感じ、違和感を表明することもあるだろう。しかし、こうした国際連帯運動の力によってWTOが機能不全に陥った結果、二国間、多国間のFTAへの交渉回路としてG8が新たな機能を持ち始めている。現在のG8は、債務の帳消し、環境問題への配慮といった口当たりのよい提言がふりまいていくが、これを隠れ蓑に、地道に積み重ねられているローカルな運動を押し潰す新自由主義的暴力が猛威を振るっているという事実をこそ、私たちはより深く認識、共有していく必要があるだろう。

このような現状を踏まえて、日本で開催されるG8対抗運動が何を目指すべきか、そこにいかなる可能性があるのかを提起してみたい。

- 2000年の沖縄の次に、北海道がG8の開催地となっているという現状を踏まえて、日本における南北問題、貧困と階級の問題、そして先住民族の問題を焦点化すること。
- それぞれのグループ、ネットワーク、個人が、反権威主義的、脱中心的な関係性を構築し、お互いの運動に敬意を払うことで、戦術の多様性を認め合い、幅広い連合を実現させること。
- 路上、キャンプからシンポジウム、コンサート会場に至るまで、資本主義的価値観とは異なった複数の自律的空間を同時に生み出すことで、それが唯一絶対のシステムではないことを実証すること。
- 運動において、暴力、非暴力といった概念を無条件に用いず、あらゆる想像力を働かせながら、常にその概念をめぐる議論し続けていくこと。
- 2、3、4の経験を通じて、日本にかつてあった様々な民衆闘争の長い歴史を現在に引き寄せること。
- 日本警察による事前逮捕、別件逮捕などの政治弾圧、最大で23日の拘留を許す代用監獄制度などを広く知らしめ、それを国際的な課題とすること。
- 2005年の香港WTO対抗運動を引き継ぐ形で、アジアでの国際連帯を強固なものにし、2007年のドイツ・ハイリゲンダムサミットで、東欧、ロシアの運動が存在感を示した延長線上に、G8において、東アジアの対抗運動が大きく登場すること。
- ジェノバ、エヴィアン、グレンイーグルス、ハイリゲンダムなどこれまでのG8対抗運動の歴史を継承し、来年のイタリア、再来年のカナダの対抗運動への架け橋となること。
- 7、8を具体的に保証し、国際的な共同、議論の場を生み出すために、US Visitの撤廃、あらゆる海外の活動家の無条件の入国を要求し、海外から日本への移動の自由を獲得すること。
- 9の現地闘争を目指す一方で、世界各地での連帯行動を呼びかけ、共に議論をしていくことで、グローバル・アクションの新しい方法論を模索すること。
- 高度に管理された日本的現代資本主義に対抗する新たな理論と実践を生み出すことで、世界の反資本主義運動、グローバリゼーション対抗運動の可能性を切り開くこと。
- 日本のG8からの撤退、G8および資本主義の歴史化を射程に入れること。

すでに示したように、G8とは単に8つの大国が集まるだけの祭典／儀礼ではない。それはグローバルな統治をすすめるうえで、強大な役割を果たしているのだ。それは今日、列強国家間を繋ぎ、それらの関係調整機関としての世界政体グローバル・ガバナンスの存在をますます露にし始めている。それに対して闘うこと、それはもはやかつての(冬宮のように)特定の場や象徴的建造物を奪取することをもって果たされるものではない。流体的に移動し回帰し遍在する暴力と対決すること、その方法を発明することなのだ。

From Movement To Society Massimo De Angelis

運動から社会へ マッシモ・デ・アンジェリス

酒井隆史・後藤愛由美 訳

シアトル以来、なによりもジェノバまでの数ヶ月、運動を信用失墜させるために、さもなくば守勢に追い込むくろみのなかで、二つの大きな争点が持ち上がった。「暴力」と「オルタナティヴズ」の問題である。いずれの場合も、私たちは明確な立場をとり、砂上に線引きをおこない、規定し、分類し、明快であるよう求められたのである。暴力についての場合、私たちが求めに応じられないということは、暴力的あるいは「犯罪的」行為との共謀の可能性をごまかすための曖昧さとして描きだされ、それによって運動全体を犯罪化するための地ならしがなされた。オルタナティヴズについては、明確な立場をとることができないことは、まじめに世界の諸問題に取り組む意図がないとして描かれたのである。

概していえば、運動総体はこれまで、こうした問題提起が、少なくともその対立者によって設定される観点からのものは、適切なものとして受け入れることを拒絶してきた。ア・プリオリの倫理的基盤を想定し、そのみが正当でまともな闘争の形態としてあれこれの運動を規定しながら、私たちの運動のなかでの「暴力的」な少数部分を枠外においたり拒絶したりするならば、運動のなかに深刻な分裂要素を導き入れることになるだろう。それはまた、この闘争の形態の社会的基礎や、べつの文脈ならばみえてくるその歴史的長所や価値に、まったく目をつぶることになるだろう。その一方で、「オルタナティヴズ」であると述べたてる包括的プログラムを基盤にして運動を統合しようと試みるならば、この運動のはらむ多様な声のなかのおびただしい数を沈黙されるにとどまらない。それはまた、自分たちがなにを望むのかを決定する、という私たち自身に属するはずの役割を、新しい政治的ヒエラルキーにゆだねてしまうことになるだろう。運動のもつ包括的で水平な特質や、大いなる民主主義精神は、諸要求を遮断してしまい、それゆえネオリベラルな資本による回収を導いてしまうおそれのある全包括的なマニフェストから、その役割を救いだしてきたのである。

しかしジェノバは転回点である。帝国警察のイタリア部署が選んだ対決のレベルは、民主主義を自称するこの国にとって、前代未聞のものであった。流血の事態となり、カルロ・ジュリアーニの若い命が奪われ、脅し、拷問、殴打が君臨した。ジェノバは「これからどうするのか?」という問いを、きわめて切迫したものとして突きつけたのである。いくつかの争点が浮上した。インターネットをはじめとするメディアにおいて、世界中で論争が巻き起こった。犯罪化の波

が押し寄せ、そこで運動はみずから再発明しなければならなかったのである。この文章で私が言おうとするのは、私たちの対立者の仕掛ける罠を回避するためには「暴力」と「オルタナティヴズ」を一体のものとして取り組まねばならないということ、とはいえ、私たちの対立者たちの押しつけるものとは異なる視点でもって取り組まねばならないということである。これはたんに状況まかせの戦術上の問題ではなく、私たちの状況依存的で具体的な戦術や戦略がこれからの数ヶ月、どのような政治的地平において形成されねばならないのか、それをあきらかにするという問題である。「暴力」と「オルタナティヴズ」という二つの論点を一体のものとしてとらえる事は、私たちの運動をどう理解するかという点で飛躍をしなければならぬということを意味している。つまりたんに目的のための手段としてではなく、新しい社会を構成する社会的力として理解することである。

オルタナティヴズ

オルタナティヴズの問題は、大衆運動組織の代表者たちだけでなく、政府代表やネオリベラルのオピニオン・リーダーをふくむ(たとえば『エコノミスト』誌や、イギリスの開発大臣クレア・ショートなど)さまざまな方面から提起されている。実のところ、多くの労働組合の指導者をふくむ、左派の伝統のなかの多数が、この運動をなかなか理解できないている。この運動のネットワーク形態に——いらだったり脅威を感じていないにしても——困惑をおぼえているのである。この運動への参加者が、このようなネットワーク形態を、運動の発展が未熟であるとか、多数の要求を「代表」するのによりふさわしい政党を構築する過程の初歩的段階であるなどとは考えていないことに、困惑したままなのである。それどころか、運動参加者がネットワーク形態を強さのしるしであるとしてとらえていることに、評者たちは混乱しているのである。そのような観察者の多くが、市場への諸オルタナティヴズの問いを明確なかたちで提起していない運動への疑惑を解消することができないでいる。明確なかたちは、つまり、平均30秒程度のインタビューで公式のメディアの回路によって議論されるようにパッケージ化することができ、公式の制度に提出できるようなプログラムのかたちで、ということである。もちろん、ここには一部の真理はあって、運動から生まれた地に足のついた要求もたくさんあるのである(限界がどのようなものであれ、トービン税や債務帳消しなど)。しかしオルタナティヴズということでもつう連想されているのは、特定の争点についてのオルタナティヴな政策というよりは、資本主義の市場の枠組み内部にあるヴィジョンへのオルタナティヴズであるような、この世界における人間の社会のあり方についてのヴィジョンである。要するに、この運動がみずからの理解の範囲にとどまらねばならないわけである。ネオリベラル・ブロックは、資本主義の市場へのオルタナティヴのヴィジョンがあるのなら、それを詳細に説明せよと求めてくる。こうして、私たちは市場の改革の点からは素朴であるか(本質的に市場の競争的法則を理解していない、「公正な」価格、「公正な」利潤、「公正な」貿易などのような観念をみよというわけだ)、あるいはさもなくば、(個人の選択の自由を犠牲にして)経済的事象をふたたび管理するための「不効率」で長いこと疑問視されてきた「状態」を望んでいるのだ、というのである。他方で、国家に基盤をおくオルタナティヴのプロジェクトにまだ根をおろした左翼活動家たちは市場の改革についての疑いをネオリベラルと共有しながら、国家の擁護を表明せよと私たちに求めてくる。要するに、かれらはともに、明確でありおなじみの観点から、資本主義的市場へのオルタナティヴを表明するように運動に求めているのである。

社会的変革の観点からは、国家と市場の二項対立がつねにオルタナティヴズについての論争を枠づけてきた。国家は(どのような形態をとれども)中心的な権威の空間として捉えられ、市場は分散した人間の相互活動の空間として理解されている。市場が不正義を作りだすとしたら、政治権力はそうした不正義を是正することができる。これが本当だとすれば、政党形態が必然となるのは明白である。言い換えれば、市場へのオルタナティヴが国家となるならば、運動のはらむ願望はそのいままあるネットワーク形態によってはきちんと回路づけられえないということになる。この運動がみずからを21世紀流の政党へと発展解消していくものとみなさないのであれば、市場へのオルタナティヴは一体全体どの

ようにありうるのだ？ というわけである。結局のところ、こうした政党形態は、その政治的方法論が改良的であるか革命的であるかを超えて、国家権力を獲得するという目標をもっている。人間活動の社会的調整という観点からすれば、市場へのただ一つのオルタナティブとしてみずから措定するようになるのはまさに国家権力にほかならない。

ついでにいえば、私たちの運動の内部から、われわれは市場の廃棄ではなく、「公正な (just) 価格」「公正な (just) 利潤によって特定の限界を制度化しようとするだけなのだ」という声があがるのに異議を申し立てることはできない。市場においては、価格や特定の利潤の「公正性 (justice)」は競争的メカニズムによって与えられる。もし競争的メカニズムとはなんの関係もない公正の概念があると考えたとすれば、私たちはこの価格を固定し強制するために中央国家権力を頼みにしなければならないと言われるのである。言い換えれば、この運動が要求するすべてが「適正な」価格、「適正な」利潤の強制であると私たちが信じるのなら、この運動の水平的なネットワーク形態と近代的政治過程の集権化された側面のあいだの矛盾はあきらかである。

しかしながら、「左派」であれ「右派」であれ、この運動は一体なにを「望んでいる」のかという問いを投げかけることで、私たちの手助けをしてきているのだ。すなわち、この運動のなかで私たちがみずから組織化する方法と、市場であれ国家であれそれらを通して社会的協働を組織化する現在の方法のあいだの根本的矛盾をはっきりさせるための。ジェノバの出来事とともに加速している過程である犯罪化の圧力のもとで、この矛盾は私たちの運動を分裂ぶくみの袋小路に導くかもしれない。運動のなかには私たちの対立者の見解を受け入れるよう追いつめられ、その組織形態を穩健化させ、運動のほかの部分と袂を分かち、たんに「圧力団体」あるいは政党になってしまうものもあるかもしれない。またもや、市場のただ一つのオルタナティブは国家であるようにみえる。運動のなかにはまたこの混乱から逃れ、私生活にこもってしまう部分もあるかもしれない。犯罪化は身体だけではなく魂をも監禁し拷問を加えるのである。高まりゆく犯罪化のキャンペーンに直面して、オルタナティブズの問題はアカデミックな問い以上のものとなっている。つまりそれは、私たちの望む世界とはどのようなものなのか、という問いである。

国家と市場の偽りの対立を受け入れる必要はない。これまで運動総体はそれを受け入れてこなかった。そのかわりこの運動からあらわれたのは、ネットワーク、水平性、デモクラシーの概念や実践、下からの権力行使の概念や実践、市場を超えた社会的資源へのアクセス権、障壁なき世界における人々の移動権といった権利の概念や実践であった。これらすべてが、市場も国家も超えた「経済的」活動のヴィジョンに結びついているのだ。このことを認識するためには、私たちはこの運動総体を、「ノー・グローバル」ではなく、「ノー・グローバル資本主義」として捉えなければならない。そうするためには、運動のあれこれの提唱者の発言ではなく、客観的な、諸闘争の連帯と循環のグローバルなネットワークの力学についてちょっとだけ振り返ってみればよいのだ。このような全体的見通しから、資本主義的市場への限界 (limit) の問いを提起する多様な運動があらわれてくる。この限界という概念は、「運動のなかの」ある人々によって提起されている、「公正な価格」あるいは「公正な利潤」のそれとは異なっている。この運動は総体として、この世界のあらゆる悪の解決のための万能薬としての成長のための成長という発想に対して、線引きをおこなっている。私は、運動のこの要素を過小評価することは大きな誤りであるとする。シアトルでのスローガンは no new round, WTO turn around であった。このスローガンが、あれこれの特定の自由化に「もういらない」と言っているわけではないことに注意しよう。新しい貿易自由化のラウンドはサービス部門のような諸部門における競争の強化、そして新しい生活領域の商品化に道を開くだろう。そのようなラウンドはあってはならないと要求することは、それゆえ、マルクスならばいうだろうが、本質的に限界をもたない社会的な生産システムへの限界の問いを提起することを意味しているのである。これは真の矛盾であって、私たちはこの矛盾のただなかでオルタナティブズの問いを提起できる。つまり本質的に限界をもたない蓄積衝動への限界ということ。これと同じことは、この二〇年にわたって、とりわけ多くの第三世界の国々であれどどこでも生じていた (たとえば多くの「IMF 暴動」)。これらの闘争は私営化、構造調整、社会支出削減、大資本やその代理人による社会生活のあらゆる領域で企てられた新しい囲い込み、自然をたんなる経済資源としかみない「自然」との関係に対抗して増殖したのである。

このような資本総体の力学に限界を与える推力であるが、それは固有のあいまいさをもっている。とりわけ運動の世界内部の特定の立場を分析するならそうなのだ。さらにいえば、運動が、総体としてみるならば資本蓄積への限界といった問いを提起できるのは、まさに多様な構成要素のあいだのあいまいさや矛盾ぶくみの立場のゆえなのである。かくしてこのことは重要な帰結をもつのである。資本への限界という問いを提起することは、同時に人間の自由な企て (free enterprise) に資本が押しつける限界の問いを提起することである (そう、自由な企てである——すなわち資本主義的市場における所有による制約や賃借の立場からの自由!)。債務の問題を例にとってみよう。運動のなかのどれもが債務の放棄に賛成している (もちろんここには、どの程度この債務が放棄されるべきか、どのような形で債務取り消しをおこなうかについては、立場はわかれる)。しかしいずれにしても、このようにして債務の桎梏から解放された資源がオルタナティブズを表現しているとはだれも言わないだろう。むしろそのような諸資源はオルタナティブズの根本的条件の一つなのである。警察による虐殺の数日前、ジェノバ社会フォーラムでナイジェリアの女性がこう語ったのだった、「15人の生徒のークラスを年間50ドルの予算で運営してごらんさい」。オルタナティブズの問いの背後にある鍵となる争点はこれだ。収入の再配分ではなく、市場の論理を超えた社会的資源へのアクセスであり、すなわち社会的な生産関係をべつのやり方で運営する問いを提起するそのようなアクセスである。生産諸手段のアクセスについてのマルクスの問いを思い返してみよう! このことはそれ以外のいろんな闘争にもあてはまる。社会サービスのための闘争 (ボリビアから英国まで)、土地のための闘争 (たとえばブラジルの MST)、GMOs に抗する闘争 (インドからヨーロッパまで)、医薬品への特許権の代表する知の囲い込みに抗する闘争 (アフリカ)、自然を尊重しながら生きる権利のための闘争などなど。これらの闘争はすべて、成長のための成長への限界の問い、商品化されていない社会的富へのアクセスの問いを提起している。この世界の支配者層は、いまやこの惑星を横断して拡散しつつありその過程において多くの社会的領域へと浸透しつつある、こうしたさまざまな限界や問いかけを怖れている。だからこそ、この人間たちは警察を配備して、脅し、虐殺し、拷問するのである。しかし私たちが社会的諸資源を解放できるとして、その場合、いかにそれらを活用できるのだろうか? オルタナティブズの一つの条件としての資本への限界の問いは、そうしたオルタナティブズがいかなる形態をとるのか、という問いを開くのである。

私たちの前にある歴史的变化は、オルタナティブズ (私は意図的に複数形で用いている) の問いが、この運動がみずから与える組織形態と切り離せないということである。手段と目的、目標と組織形態とが切り離されていなければならないという観念は、広く浸透した誤りである。かつて、それが「党」と政治的行動が約束する「新しい社会」のあいだの悲劇的な亀裂をもたらしたこともあった。党が大衆を導き、「新しい社会」はその未来の目標を表現している。やがて、たかさんの社会的主体の現実の欲求が党の戦術とは両立しないことがあきらかになってくると、それはエリートの提起する目標を達成する目的に従属しなければならない、ということになる。ここではコミュニズムや社会主義の歴史を想起してみればよい、それは女性や黒人、ゲイやレズビアン、あるいは党の指導に服することのない抑圧された草の根の労働者や農民の無視には事欠かないのである。いまではこのようなモデルは概して運動からは拒絶されているのであって、そのかわり運動は現在、尊重、尊厳、草の根民主主義、真の力の行使への欲望によって特徴づけられる。よくあるように「この運動はなにを望んでいるのか?」と問うことは、マルチチュードに対して、その「路線」を、あるいはその未来の目標を与えよ、と要求することにほかならない。それは最良の場合でもこの運動から内容を取り去るものであり、最悪の場合は、国家対市場という二項対立に閉じ込められた私たちの対立者の観念を受け入れるよう強いることである。そのかわりに私たちがまなざすべきは、いかにマルチチュードが、実際に一体なにを望んでいるかを知るために、その差異をどのように組織しているかであり、いかにみずからが望むそのことを実践しているか、である。そしてまさに私たちが潜り込み、探求し、分析し、そしてまた、なによりも参加する必要があるのはここなのだ。かくして決定的な問いにいたりつく。今日、私たちの組織的実践、私たちの水平性やネットワークを反映している形態で社会的協働を組織化できるとしたら、それはどの地点にまでだろうか? 近年、開催されているさまざまな対抗サミット (その最新のものがジェノバである) の生産、さまざまなサパティスタのいう encuentros の生産について考えてみよう。経済的循環

を超えて、社会的、相互的連帯の実践に触発される、他者との競争的關係を超えて、使用価値を生産する社会的実践の多くを考えてみよう。すべてこれらは、資本主義的市場や国家を超えていく人間活動の調整の様式なのである。実際、ジェノバでのTシャツにプリントされたスローガンである「もう一つの世界は可能であるだけではない」は完全に正しいということにとどまらない。むしろ私たちは、自分たちのネットワークの形態を通して——矛盾や限界、あいまいさはあるものの——すでに辛抱強く、骨をおりながら、もう一つの世界を構築しているのである。

私たちの組織形態そのものが一義的な重要性をもっている。たんに組織形態には外在的な目標を達成するためというよりは、資本主義的市場を超えた社会的協働の新しい形態を構成する社会的力として、である。このことをよりよく理解するためには、資本の世界もまたネットワークから構成されていることを理解する必要がある。資本主義的な社会的協働の形態内部では、私たちはたがいに競争者として、ネットワークのなかで相互作用する社会的主体として関係するように強いられる。しかしながら、二重の差異がある。第一に、資本のネットワークは、自分と他者との関係を規定することに私たちが口を挟むのを許さない。実際、ここでは他者は不可視の主体であり、口が聞けず耳も聞こえない。市場である抽象的メカニズムにとってかわっているのである。ここでは社会的諸関係はマルクスが商品フェティシズムの分析で述べたように、人間同士のあいだの物質的關係として、モノ同士のあいだの社会的關係としてあらわれる。目的それ自体としての体系的で継続的な競争に基礎をおく他者との社会的諸関係のネットワーク形態である。実存的な観点からするなら、そうした関係はまったく無意味である。そして、近年、新たな社会的活動の領域を吸収することで強化されてきたのは、まさにこの相互作用なのである。反対に、水平に結びつく諸グループによって形成される「ノーグローバル資本主義」ネットワーク運動に参加している人々は、みずから突き動かす欲望が、[そうした資本主義的市場によって規定されたものとは]べつの社会的関係を実践することにあることを示している。つまり、人間の関係は、あらゆる生活領域における際限のない競争的労働に基礎をおくそれ、「他なるもの」を脱人間化された事象へと変形させてしまう関係とは異なっているのである。いずれにせよ、市場は現代のネオリベラル・プロジェクトのチャンピオンであるハイエクによって讃えられるような自生的メカニズムではない。それとは逆に、国家やその抑圧装置は市場の存在、作動、防衛の条件そのものを供与するのである。すなわち、資本主義的な水平性はここで終わる。市場がそれをもって防衛され強制されるネットワークは、まったく軍事的性格のものであり形態において垂直なものである。この意味で、(第三世界諸国の多くで日常的にみられる抑圧行為がらと同じく)ジェノバにおけるこのところの出来事から学ぶもののは大きい。

運動内部の差異のあいだの相互作用もふくむ、運動の社会的実践の内側からみるならば、国家と市場(中心的権威としての国家、社会的協働の領域としての市場)二項対立は、偽の対立である。このグローバルな運動の網の目において、社会的協働は、草の根の民主主義、コンセンサス、対話、他者の承認を通して、みずからのルールを表現している。その一方で、これらの規範がひるがえって社会的協働の様態が規定する。「権威」と「社会的協働」は、フィードバックのメカニズムにおけるのと同じような流動的關係のうちにある。外部から指令されるのではなく、相互作用によって自己構成されるのである。ハイエクは、まさにそのルールの抽象的性格ゆえに個人的自由を可能にするメカニズムとしての市場を信じている。ハイエクにおいて人間の自由は、抽象的メカニズムによってあらかじめ与えられたメニューから選択する自由であった。この機構は、言い換えれば、個人の具体的性格にとっては外在的である。実際、歴史的にそれは国家によって、強制とともに課せられてきたのである。ところが、この運動において女性と男性の自由は、メニューそのものを選択することを望む自由である。というのも生とは抽象的なものではなく、きわめて具体的なものだからである。それゆえこの運動は、みずからの相互作用のルールについてはなにも言わない断片化し孤立した個人による選択の自由としてのみ自由を捉えるネオリベラルの欺瞞から自由をもぎとることで、自由のための戦いを支援する傾向にあるのだ。

それゆえ道のりは必然的に矛盾にみちたものになる、というのも、だれもが同意するためには、だれもがみずから他者の承認のうちに放棄せねばならないからである。しかしまさにこの混合と融合の過程でなくして、マルクスの夢想した

「自由な生産者の連合体」とは一体なんだろうか？

それゆえ「ノー・グローバル資本主義」の運動は、二つの独立した前線を開くのである。一つは資本への限界という前線であり、それゆえ資本が私たちに押しつける限界に対抗する前線である。これは資本主義的市場を超えた社会的資源へのアクセスの前線である。もう一つは、他者との関係の前線である。尊重、尊厳、直接民主主義に基礎をおくネットワークの前線である。前者はコモンズの問いを(生の領域の商品化の底にある囲い込みに対立する)提起する。後者はコミュニティの問いを提起する。あるいはマルクスの『経哲草稿』の言葉で言えば、かれらにとっては他者が一つの欲求となる共同存在の問いである。コモンズとコミュニティ。この運動が、総体として捉えられるなら——自覚することなしに、あるいはメタナラティブで装いつつ——21世紀のコミュニズムの問いを提起しているというのは本当だろうか？

暴力

これまで論じて来たその特徴(ネットワーク、デモクラシー、コンセンサス)ゆえに、「この運動はなにを望んでいるのか?」という問いを外部から提起することは問題ぶくみのものとなる。この運動が実際に示してきたものは、水平性と参加デモクラシーである。まさにこのために、運動の内部から問いを発することは、実践的であり関係構築的であり、また規範や社会性を規定する過程の一部であるのだ。「これからどうするのか?」あるいは「あれこれの問題をどう考えるのか?」という問いは、「目的」や「目標」達成のための「もっとも効率的な方法」を求めるといった純粋に道具的なかたちをもつ経済的思考態度でもって、応答することはできない。この運動の実践を理想化しようなどとは思わないのだが、そのネットワーク形態——尊重、尊厳、自律を要求してきた数十年にわたるさまざまな主体の闘争の上に構築された——によって、参加者たちは手段と目的のあいだの区別がだんだん薄れていったのだ。言い換えれば、この運動は一つのコミュニティに、あるいはより正確に言えば、諸コミュニティのネットワークへと転換しつつある、という感覚が高まっているのである。諸運動の運動、あるいは諸ネットワークのネットワークとこの運動は異名を与えられてきたわけだが、諸コミュニティのコミュニティとも名づけるだろう。実際、この運動をよりよき世界のための闘う人々のコミュニティとして捉えることではじめて、私たちの直面する課題を適切に位置づけることができるのである。

私たちの運動の直面する課題の一つは、犯罪化の危険である。犯罪化が起きるのは、多様な運動の実践が、均質の「犯罪」行為の集合体へと、運動の欲求や夢想在犯罪計画へと、そしてその生きた多様性が無定形の塊へと置き換えられるときである。これは運動が不法行為を企てるかどうかの問題ではない。運動の犯罪化は、法の侵害とはほとんど関係をもたない。市民的不服従の伝統を想起すればわかるように、あるいはそれが開かれた大衆的実践の場合のように、法の侵害は「正当」でもありうる。犯罪化が生じるのは、運動とそれ以外の社会とのあいだにうまく壁が築かれるときである。犯罪化が生じるのは、恐怖や混乱状態が蔓延した結果、新しい世界の共棲の仕事へと参加しようとしかけた女性や男性を、自室やアパート、一軒家、あるいはテント、巣穴へと引きこもらせ、きたる20年そらのあいだドアを閉じてしまうときである。犯罪化が生じるのは、うまいこと抑圧が行われ、運動が社会へと転換するのを妨げ、運動の欲求が多くの人の夢想在行動に感染することを妨げるときである。この点においては、遅かれ早かれ、運動を犯罪化しようとするたくらみがあらわれることは疑いえない。

犯罪化は誘惑と手をとってあらわれる。政府からの公式の声明を聞くならば、かれらが異議申し立てについて、その方法には批判的だがその理由には賛同しているように考える人もいるかもしれない。政府や銀行関係者が私たちにいうのは、あなた方と同じぐらい、われわれも死に瀕した子どもたち、森林の消滅、生活の破壊に関心をよせている、ということである。まさにそのためにこそ、われわれは会合を開き、より多くの市場を形成し、より多くの競争を促進するのだ、そして、まさにこのためにこそ、サミットは中断されてはならぬのだ、というわけである。なぜなら公式代表者たち(たい

てい投票権をもった混乱した住民の20%を超えた投票率で選挙されたわけではない)は、万人の善のために働いているのだ、という。かれらは問題については同意し、私たちのとる方法についてはそうではない。「暴力」はつねに、公式当局のやり方を認めない方法のうちに嗅ぎ取られてしまう。日常化した暴力は不可視にされたままで、「暴力的」であるという刻印はつねに異なった人々に押されるのである。

暴力についての言説を利用し、運動についてのかれらのイメージに適合するような、メディアの創りあげる愚劣さの手を借りてそれを都合のいいようにねじ曲げ、運動を犯罪化しようと試みのあることなど、ここでくり返すまでもない。現状において日常的事象がそれ自体、暴力的であること、つまり無数の人々から食物や水を奪い、健康や特許権などによって困り込まれた人間の知識の遺産へのアクセスを強奪するといった意味で暴力的であることはここでくり返すまでもない。人類にたえざる厳しい生存競争を強いる法や馬鹿げた伝統によってこうした日常的なルールを強制しているのだが、実際のところ、食料倉庫、情報、知識、資源がかくも豊かであるときに、たがいにたえず競争しつづ走り、かくして人工的に希少性を作り上げている、などという事態はただたんに愚かである、こんなこともここでくり返して指摘するまでもない。そうだ、かれらによれば、こうしたホラーばなしすべてが常態なのだ。むしろ暴力的であるのは、多国籍銀行(それは債務と呼ばれる国際的扼殺機械を代表している)の窓ガラスを割ることなのである。

そう、ここであらためてくり返し指摘する必要はないのだ。だれかほかにもっと適任者がいるだろう。しかし「暴力」の問題は、かれらは私たちよりもはるかに暴力を行使している、というたんにそれだけの理由からして棚上げすることはできない。制度的暴力は判断の権力を保持しているのであって、この判断の権力は社会の常態への注目を誘わないよう私たちを遠ざけるのである。G8の寡頭政治によってジェノバに打ち立てられた壁を、だれも傷つけることなく平和のうちに崩すことができたとしても、いまだ私たちは暴力的と呼ばれるだろう。そのかわり、ジェノバではレッドゾーンの外で都市パトルが勃発し、いくつかの銀行、保険会社、旅行会社、セックス・ショップ、車などが犠牲となった。これは正しいだろうか？ それとも間違っているだろうか？ 運動内部の論争は、この正しいか間違っているかの二極のあいだ、つまり私たちの敵対者が押しつける二極のあいだに退行し、この二極のあいだを揺れるリスクを冒している。かれらは「暴力的」な窓ガラス破壊者たちを、運動に対して「孤立化」させ「否認」することを求めることで、運動を犯罪化しようと試みているのである。善と悪に閉じ込められた精神の枠組みは、[充たすことが]不可能であり脱文脈化した天下りの基準にしたがって無垢な者と罪人を嗅ぎだすのであり、それゆえだれかを、この場合だといわゆる「ブラック・ブロック」を、生け贄にするのである。

そのかわりに、私たちはこの問題について善悪を超えて考察する必要がある。くり返すが、それは[おこなわれたのが]適切な時点であったのかそうでないかの問題でも、窓ガラスを割ることが倫理的に正しいかそうでないかの問題でもなく、この行動が具体的な文脈のなかで責任ある行為だったのかという問題である。それゆえ責任の問題こそが、私たちの取り組む必要のある鍵となる問いなのだ。

さて、ジェノバの例を簡単にみてみよう。ジェノバにおける「暴力」について語ることは、実際には警察について語ることである。ワルター・ベッコのいうように、これは「警察暴動」なのである。私もベッコと同じく、「私たちは戦術について同意しないだろうが私たちの陣営にいると主張する人々を否認することは適切ではない」と考える者である。しかしジェノバにおいて「ブラック・ブロック」(Bs) (ちなみに、スターホークにしたがって、「ブロックス」[訳注:一枚岩の塊といったイメージ])というよりは「クラスターズ」[多様で異質なグループの連なりといったイメージ]といったほうがより正確だろう)と呼ばれる多様なグループに属する人々による、ベッコいうところの「寄生的戦術」をめぐって批判はなされねばならない。

寄生的戦術があらわれるのは、たとえばこのクラスターの諸集団が「デモ行進のはじにとどまり、そこから警察に投石などをして挑発する」ときである。かくして警察はデモを取り締まる口実が与えられるわけである。ワルター・ベッコのこの問題へのアプローチは、「秩序ある退却と、すばやい前進、規律ある抵抗」に向けて人々を組織化することで、私たちの大規模デモを「世界へとメッセージを届けるためにより組織的に効率的」であるようにするにはどうしたらいいかの、

といったものである。かくしてかれは「Bs」問題を中和するための戦略を提起するのである。この戦略は本質的に二つの主要な要素をもつ。1)「より開かれて誠実であり信頼に値するBグループたちと動員のための計画についての対話をはじめる。その意図は私たちの大衆行動の政治的、倫理的基準を尊重するようかれらに同意を求めることにある」、2)「暴力的振る舞いを制限し取り除くための説得や方法といった一連の非暴力的手段」を確立すること。

ベッコのアプローチは「破壊された」窓と「暴力」の問いを道徳化していないという利点はある。かれの立場は多国籍銀行の窓を割ることの倫理ではなく、むしろデモ参加者の安全と尊重の倫理にかかわっているのである。しかしベッコの立場が有意義であるのはそこまでだ。それはBsの内部に、より「信頼に値する」部分があるのを認めるのだが、こうしたBsの一部でさえも「他者」として、運動にとって異質ものとしてさえ捉えるというリスクを冒している。かれは「私たちの大衆行動の政治的、倫理的基準を尊重するようかれらに同意を求める」ために、Bsの一部と対話しようと求めているのである。しかしながら問いはこれ以上の次元をふくんでいるのだ。すなわち「Bs」とそれ以外のあいだの双方向的コミュニケーションのための土台はあるのか？ 同じコミュニティを構成する二つの部分として「暴力」と「非暴力」を定義する土台はあるのか？ 両者ともにその双方の行動の「倫理的、政治的基準」を尊重することに同意することはできるのか？ 双方が、善と悪についての感覚の違いを乗り越えて、戦略についての討議につくことができるのか？

どのクラスターも、どのアフィニティ・グループも、たがいを認めあい、相互を承認し、たがいに責任を持ち合うよう、行動を調整することは可能だろうか？ もし「寄生的戦術」が私たちのデモの常態になり、運動のそれ以外の部分かれらへの反応がジェノバ直後の余波のうちにあるようなモデル——ここでは「Bs」は多数によってたんに否定され、「挑発者」「愚か者」あるいは「ファシスト」とすらされたのである——をくり返すようなものであれば、確実に「ノー」である。

街頭でのパトル、燃える車、商店を映し出すTVの最初のコメントは、「暴力」をこの「悪しき」人々のブロック(連中はどれほどいるのか？ 1000人？ 2000人？ 5000人？ メディアはその数についての憶測に狂奔した)と「連中を擁護した」[とされた]それ以外の多数の双方にあてがった。犯罪化をもくろむ最初のプロットとはどのようなものかという、共謀者——すなわち異議申し立てする動機を持つ者すべて!——の背後に醜悪な粗暴である暴徒がひそんでいる、というものである。「寄生的戦術」にでたいくつかの無責任なグループがあったのは、まさに「Bs」が「ブロック」ではないそのためなのだ、みずからの行動の調整に失敗したからなのだ、ということを知らしめるためには数日かかった。デモ参加者の側の自衛から勃発した警察との大衆的な街頭でのパトルは、デモのあらゆる部分で起こっていたことであることがあきらかになるにも数日はかかっている。世界社会フォーラムのスピーカーたちも、「暴力」を糾弾せよとの公式メディアや制度的な要求と、特定の文脈の外側では「暴力」と認めうるはずもない警察の暴行へのマルチチュードの怒りのあいだで締めつけられ、どうにも身動きのとれない立場に追い込まれた。「善」と「悪」の論理のなかに封じ込められたことで、メディアに敏感なスピーカーたちは罠にはまり、誤った、致命的に誤った問いを投げかけることで自己防衛をはじめたのである。いわく、「なぜ警察はブラック・ブロックが暴動をおこすのを黙認しているのか?」(しかし、かれらは「ブロック」ではなく小グループであって、いろんな人々と混じり合っているし、世界社会フォーラムのスピーカーたちをふくむだれにとっても、平和なデモのなかで黒服を着た者を逮捕することは許されないはずである!)。あるいは「なぜ警察はブラック・ブロックを入れさせたのだ?」(しかし、私たち、世界社会フォーラムのスピーカーをふくむ運動は、自由な移動を強く呼びかけてきたし、この権利のために闘い、いまでもそうなのである。私たちは黒い服を着ているとか——あるいはその服がどんな色であれ——あるいはスイス製のアーミーナイフを所持しているとか、耳ピアスや鼻ピアスをしているとか、そんな理由で人々が立ち入りを禁止されることを望んでいない)。だからといって、歴史的、戦略的観点から、国家による犯罪化の要求と現場での「暴力」の加速のあいだの利害のあいだで起こりうる衝突についての問いをやめるべきだ、というわけではない。それが意味しているのは、ただ、運動を構成している社会的勢力はまたこの人々もふくんでいるのだから、「Bs」を「難詰する」警察や国家に与するわけにはいかない、ということのみである。

そう、「寄生的戦術」でデモを危険にさらすグループを定義できる形容詞があるとすれば、それは無責任というものである。無責任という形容は、それが私たちの闘争へ「Bs」もふくまれていることを前提としているがゆえにその批判は軽

いものではない。人が（無）責任でありうるのは、特定の外部の勢力あるいは特定の大きな倫理的概念に対してではなく、みずからのコミュニティに対してのみである。特定の文脈を抜きにして無責任でありうることはできない。それに責任はなによりまず、コミュニティに属することを前提とする他者との関係である。もしだれかが自分のコミュニティ内部の「他者」に無責任であるとして、よく考えてみるならば、私たちが闘っている世界とはまさにこのような他者への無関心を基盤に成立しているのではなかっただろうか。無責任であることをつづけ、参加することを拒否し、孤立をつづけるとすれば、その人たちはみずからをそれ以外の部分から切り離してしまうことになる。もし新しい世界の姿がゲッター化であると考えれば、私たちは本当に異なる世界観を持っていることになり、つまるところ、私たちは同じコミュニティにはいないということになる。

しかし私たちが同じコミュニティを分かち合っているとすると、私たちがともに新しい世界は他者との尊厳ある関係によって規定されると考えているのなら、運動は責任の実践を理解しなければならない。責任の実践は外部からは提起されず、コミュニティの内部からのみあらわれうる。責任、つまりコミュニティ内部での「他者」の承認であり、それゆえその「他者」に関与する意志は、犯罪化の戦略を無効化する方法なのである。それはまた、「もう一つの世界」についての私たちの夢想によってはまだ触れられていない社会的領域へと接触するための、私たちのコミュニティの基礎なのである。

「ブラックス」も「ピンクス」も「ホワイトイズ」も「レッズ」も（そしてかれらの追求する戦術を共有するだれも）がたがいに議論に参加しなければならない、というのも私たちはみな同じコミュニティの一部だからである（諸コミュニティのコミュニティ）。このために、私たちはみんなの行動の価値をたんに目標のための手段としてではなく、他者への関与の手段といった観点から考える必要があるのだ。それがやれたあとではじめて、私たちはベッコのいうような、特定の文脈での暴力を無効化する説得や方法について語ることができるのだ。

責任の実践を理解すべきであるのは「暴力的」戦略を信じている者にかぎらない。「非暴力主義者」も同様である。もし「メディア受けよくする」ことのコストが、社会的諸力のメディアによる表象を受け入れることであるとすれば（たとえば、「Bs」を、20年にわたるネオリベラル政策がもたらしたコミュニティの崩壊からあらわれた固有の欲求、歴史、夢想、動機をもつヨーロッパの若者によるゆるやかな連合体とみなすのではなく、一つの塊とみなすといったような）、「メディア受けよくする」ことのコストが、運動総体の犯罪化のゲームに危険なまでに有利にはたらく脱文脈化された論理のうちに罠にかけられることとすれば、メディアへの依存度を低くした方がいい。つまるところ、私たちは独立したコミュニケーションの回路を持っているのだ。ジェノバでは、テレビの公式の報道も、ウェブ上に寄せられたインディメディアのビデオ、そして写真、テキストの後を追って、警察による暴行の現実を認めるように強いられた。このとき、オルタナティブな情報生産が公式の回路に侵入したのであって、公式の回路は、たがいに競争をしながらも、ウェブ上を飛び交っているイメージや物語の大量生産に依存していたのである。結局、「大衆 (masses)」へのメッセージは、職場や近隣、学校や病院、教会、街頭での説得や議論といった日常的活動によった方が、私たちが孤立しながら骨ぬきされた芸能人の愚かさにつきあうといったリヴィング・ルームでよりも、よりよく届けることができるのだ。結局のところ、新しい世界は新しい社会的関係によって構築されるのであり、それはテレビのザッピングよりは少しは関与を必要とする能動的参加を必要とするのである。

この大規模で多種多様である運動のすべての陣営が考察に取り組みねばならない。「非暴力」も「暴力」もともに、暴力と非暴力を硬直的に対置することが、歴史的にみて、つねに私たちの反対者の側が好んだやり口であるといった重大な事態を見過ごす危険をはらんでいる。その性格も文脈も無視しながら「暴力」を論難することで、むしろ暴力をみずからの都合のよい文脈では活用してきたのがかれらである。歴史が教えるように、運動に侵入し、ファナシズムと共謀し、暴力の活用を強化し加速させつつ、恐怖と混乱といった雰囲気の中からは、犯罪化によって運動総体への暴力的な国家の抑圧をエスカレートさせる、そしてそれによって国家の「非暴力」なるそのメッセージを実行しよう望みできたもの、かれらである。厳格なドグマはつねに厳しい帰結をもたらすのである。

「非暴力的」立場も「暴力的」立場もともに、対立者の強い硬直性、つまりこの世界の真に暴力的な論理の永続に奉仕する硬直性に陥ることなく、たがいに対話をしなければならない。PGAネットワークのエル・ビエジョ (El Viejo) は、次のようにフレキシビリティの問題を提起している。

「ブラックス [[Bs]] は、いったいどのようにして警察の挑発者と同じことをしているのだろうか？ 私にとってそれは、かれらの多くが暴力に魅せられているからだ（私たちの多くが70年代にそうであったように）。魅せられるのはなぜか、暴力は、特定の状況を現実的な政治的評価にさらす必要をなしにしてしまうそのために、実践的にただ一つの政治的表現の形態、あるいは少なくとも、つねに適切であるような政治的表現となるのである。非合法性は多量の献身と勇気が必要とするがゆえに、グループのアイデンティティを定義するにはまったくもってうってつけなのである。要するに、かれらは問題を過剰に単純化している。しかし同じような仕方、平和主義や選挙に魅せられている者たちも、それにかわることはない。成功をおさめる運動は、状況に呼応し、必要ときに暴力を活用することができ、しかし、それをユーモアと音楽と理性、忍耐をもっておこなうような運動である。あるときは一徹であり、あるときは柔軟である。フレキシビリティはどんな生命体にとっても生存の秘訣なのだ」。

しかし、外部に向かうフレキシビリティは運動内部のフレキシビリティに基礎をおいている。コミュニティの問題を提起することは、それを構成するさまざまな部分のあいだのフレキシブルな関与の問題を提起することであり、ある一部の好む闘争の方法が不可避に限界をもつことの承認、そしてそれゆえ「他者」の承認の問題を提起することである。フレキシビリティやコミュニティの問題を提起することは、グローバルな運動のかつてない成熟という問題を提起することである。

諸コミュニティのコミュニティ——ローカルな闘争とグローバルな闘争

「暴力」と「オルタナティヴズ」といった状況依存的な問いを考察するとき、私たちの出発点は同じである。つまりコミュニティの構成である。ということは、尊重、自律、連帯、責任に基盤をおく他者との包括的な水平的関係である。ここでコミュニティとは、私たちが現実^{フロップ}に属している「実際の」コミュニティ——専門職のコミュニティ、ビジネス・コミュニティ、居住コミュニティ、仕事のコミュニティ、地域コミュニティ——ではないつもりである。しばしば、これらは、たとえば専門、事業、住宅、職業、地域などといった共通点をもつ人々のグループの理念的な表象を指している。このようなコミュニティの定義において、この共通点はそれ以外を圧倒している。ある意味で、残るすべてがこの共通の性格に従属しているのである。たとえば、私たちは「会社コミュニティ」なるレトリックをいやというほど聞かされている。われわれ（すなわち、賃金と命令の位階秩序のうちにある労働者、経営者、管理職）はだれもおなじ会社に属しているのであり、たがいを理解する必要があるし、すれちがい（賃金や労働条件についての、職務権限についての、特権と権利についての）は脇におかなければならない、なぜならわれわれは一つのコミュニティであって、だから外の連中との競争的闘争に集中しなければならない、というわけだ。

ここで私のいうコミュニティとは、一つの人間集団に共通の社会的条件にもとづくものではない。この種の〔社会的条件にもとづく〕コミュニティはつねに道具的に操作されるのである。他者と私の共通性を規定するどのような一つの特徴も、その同じ他者とのおびただしいそれ以外の差異には目をつぶることによっている。なぜ、しかしかの文脈や時間に、この一つの特徴が選ばれて、共通性を表現するのか？ この選択の政治的意味とはなにか？ いかにして権力諸関係はこの選択を形作っているのか？（逆にいえば、他者と私の差異を規定するいかなる一つの特徴も、同じ他者とのそれ以外の無数の共通性に目をつぶることによっている）。

そうではなく、ここでいうコミュニティとは他者との関与の一つの形態である。それは地域性、職業、社会的条件、ジェンダー、年齢、人種、文化、性的指向性、言語、宗教、信条を超えている。それはこれらすべてを、共同の諸関

係の構成にとっては重要性において副次的なものとするのである。実際、こうした基準すべては、原材料としてのみあらわれるのであり、他者との関与の様態の諸前提としてのみあらわれる。

これは果たして、私たちが夢想した世界の萌芽的なかたちだろうか？ どのようにして私たちはそれを実現することができるのか？ もっとたくさんの方が私たちに合流しさえすれば、地域や近隣住区で息づいている他のコミュニティが、その豊かさ、ユーモア、問題を携えて合流してさくくれるならば。私たちが自分たちの闘争を、この地球上で男性、女性、子どもたちが日常的基盤の上で関与している日常的闘争に配置することをしないならば。

戦術をめぐる論争はこうして跳躍を果たさなければならぬ。それはメディアの注目をひく大規模なサミットの際に大デモをするか、地域での活動に立ち返るかのあいだの選択の問題ではない。これはまたもや誤った対立だ。私たちの大規模なデモは、私たちのローカルな闘争の宇宙なしにはありえないし、大規模なデモも、それがネットワークや対面的接触、友情、人間的な絆を生みだすがゆえに重要なのである。しかし私たちのローカルな闘争は、それ以外の闘争すべてと継続的で粘り強い結びつきを持たなければ無であり、ローカルな闘争はそれが私たちの欲望や願望が形成される場所であるがゆえに、重大なものである。私たちにグローバルなシーンとは他者の発見であり、ローカルなシーンとは「私たち」の発見である。しかし、「他者」を発見することによって、私たちは「私たち」の感覚を変えるし、「私たち」を発見することによって、「他者」との関係を変える。コミュニティにおいて、共通性とは前提ではなく、発見の創造的過程なのである。それゆえ、私たちはこの両方をおこなうわけであるが、そのときでも、コミュニティを、つまり他者との関与の様態としてのコミュニティを念頭においているのである。サミットに際して次の大規模なデモを組織するとき、私たちは——「私たち」とは、「暴力的」であれ「非暴力的」であれ、さまざまな戦術を信頼している者を指している——このことを念頭におく必要がある。デモを取り締まる連中に思いをめぐらせる前に、私たちはまえもって地域コミュニティとの時間をたくさん持とう。そこにおもむき、かれらと話し、そこで生活をしている人々が、どのぐらいのぶつかり合いだったら許容できるか、聞いてみよう。地域の街路が打撃を受けること、車がひっくり返されること、電話ボックスが焼かれることを目の当たりにして、かれらは悲しい思いはしないだろうか？ 周知のように、だれもが保険をかけているわけではないし、車がたんなるステイタス・シンボルではなく生活に必須の道具である人もある。地域によっては、郵便局や電話ボックス、あるいは銀行の支局ですら、建て替えるのに数ヶ月かかるころもないだろうか？ 私たちはこうした論点にかかわる議論に、「暴力」と「非暴力」の問いを具体化させ、人々の現実的な欲求や生活に近接した地に足のついたものにしながらかかわることができないだろうか？ かれらの問題と私たちの問題、かれらの夢想と私たちの夢想を語ることはできないだろうか？ 草の根の組合はなにを主張しているのだろうか、町内会はなにを言っているだろうか？ 私たちは次のデモの目的、そして運動総体を退屈したマスへと転換させてしまいうリスクをおかしても、儀式化された実践（「暴力的」であろうと「非暴力的」であろうと）をもって続けるべきであるのか、みずから問い、論争できるだろうか？ かれらが街頭でのちょっとした混乱をまさに自分たちが欲していたものであると考える可能性もある。どんな答えがあらわれるか、だれが予測できるだろうか？ デモクラシーを実践するコミュニティにおいては、実際に相互に尊重しているかぎり、なんでも語るができる。

究極のところ、ポイントは、ただ一つの正しい戦術は他者との関与の共同の過程からあらわれるものである、ということにある。付け加えれば、ただ一つの「正しい」世界はまた、他者の承認のこの過程からあらわれる世界である。そしてこの世界においては、ローカルとグローバルの区別とは、「コミュニティ」とその外部のそれではなく、「諸コミュニティ」と「諸コミュニティのコミュニティ」のあいだの区別なのである。

訳者解説

ここで訳出したエッセイ、マッシモ・デ・アンジェリス「運動から社会へ」(Massimo De Angelis' From movement to Society)は、2001年、ネットマガジンThe Commoner (www.thecommoner.org)に掲載され、のちにジェノバ・サミットをめぐって公開されたパンフレット(On Fire: The Battle of Genoa and the Anti-Capitalist Movement, One-Off Press, 2001)に再録された。この訳は後者のパンフレットからおこなった。

本エッセイは、2001年の夏に開催されたジェノバ・サミットにおける諸運動の高まりと、それに対する弾圧の強化といった文脈のなかで、一つの危機あるいは転回点を迎えていたオルタナティブ運動の内部の論争に介入したものである。「オルタナティヴズ」(少し不格好ではあるがオルタナティヴを複数形で表現することでこの運動の特異性を表現しようとする筆者の意図を汲んでこのようにひとまずした。「諸オルタナティヴ」よりはマシか、と思うのだが、よりよい訳語のアイデアがあればぜひ提案してほしい)と「暴力」という二つの論点を設定し、それらをめぐって密度の高い考察をくり広げている。

ここでデ・アンジェリスは、運動に危機を導き入れていた「暴力」の問題、より具体的には「ブラック・ブロック」というクラスターの戦術の問題をめぐる運動内部での切迫した論争への介入という、きわめて状況密着的な考察をすすめる一方で、オルタナティブ運動、反グローバル化運動、あるいは「運動たちの運動」「ネットワークたちのネットワーク」とさまざまな名指されるこの新しい運動の、いったいなにが特異であるのか、どこにそのもっとも強い潜在力があるのか、を運動の未来への展望として示唆している。

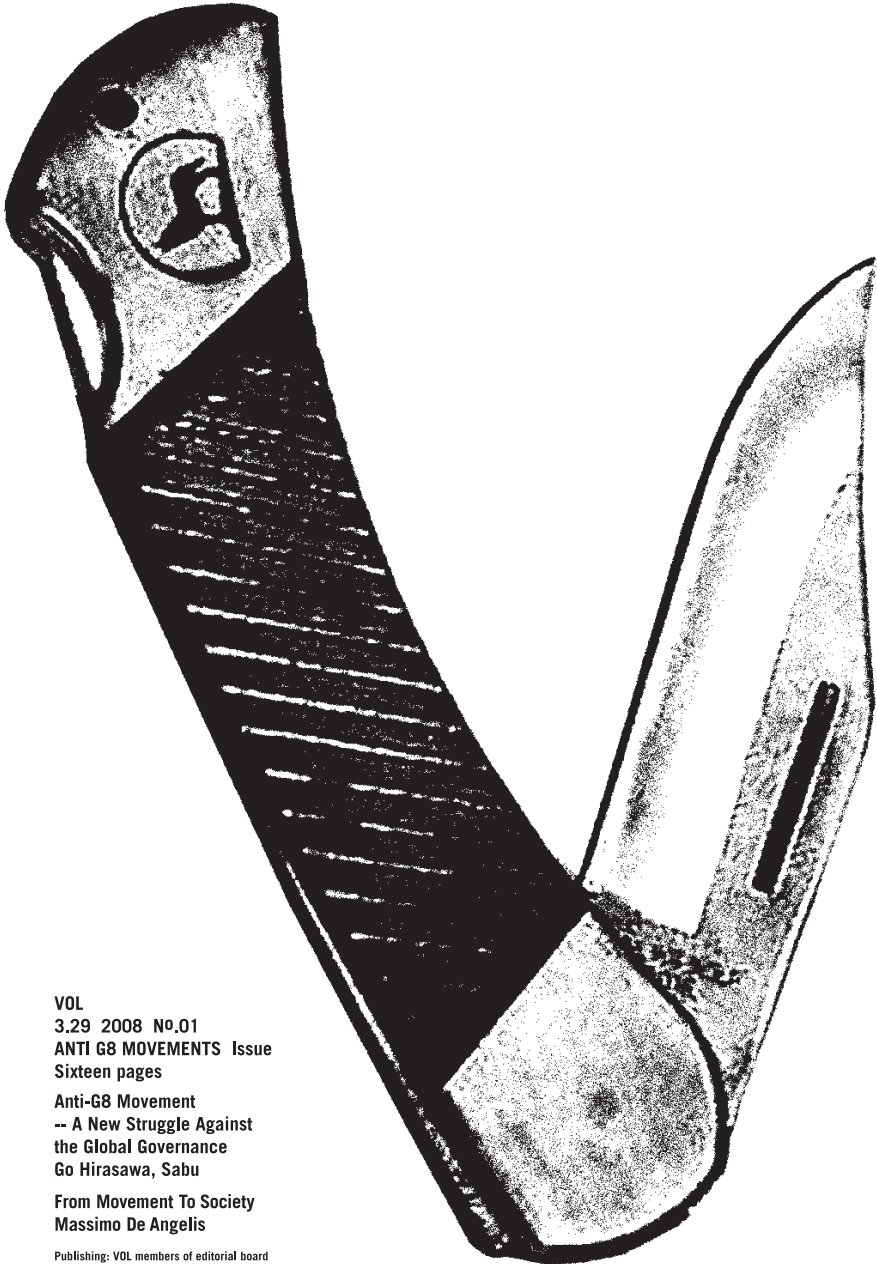
おそらく、ここにあらわれている国家とメディアによる運動総体の「犯罪化」や、メディアによる表象の問題、暴力と非暴力の問題、「オルタナティヴズ」の国家と市場の二つの選択肢への封じ込めといった論点はすべて、洞爺湖サミットを控えた日本において多少装いを変えたとしても、もしかすとはるかに野蛮なかたちで、必然的に浮上するだろう。とすればここでの考察は、すでに運動のなかで私たちに手渡された一つの資産として、実践的な課題に対応するための一助となるはずだ。

著者について簡単にふれておきたい。マッシモ・デ・アンジェリスは現在、イーストロンドン大学経済学講師。これまでの著書に『ケインズ主義——社会的コンフリクトと政治経済学』(2000年)(未訳)をはじめ多数の論文がある。最新の著作は今年になって出版された『歴史のはじまり——価値の諸闘争とグローバル資本』(AK Press)である。すでにデ・アンジェリスは、ネットマガジンThe Commonerなどの場で原始的蓄積をめぐる論争を主導するなど、オートノミズムの伝統からあらわれた新世代の研究者のなかでも先鋭的な作業を展開している研究者として注目されていた。このフクヤマの『歴史の終わり』を反転させたタイトルを与えられた著作は、原始的蓄積論、非物質的労働論、あるいは価値論の現代的な展開をふまえながら、『資本論』を再読した労作である。このエッセイでも「オルタナティヴズ」を定義するときに用いられている「限界」の概念、あるいはコミュニティを論じるとき「外部」「他者」といった概念は、この『歴史のはじまり』ではより厳密な理論的規定を与えられている。

デ・アンジェリスが活用するような概念群は、かれのヴィジョンをハートとネグリの『〈帝国〉』の「〈帝国〉に外部はない」といったテーゼに集約されるヴィジョンと、決定的とはいわないまでも大きく分かつものである。その背景には資本主義についての原理論的な差異が一つにはあるのだが、このエッセイを読んでみるならば、またべつの文脈もすかし見えてくる。つまりそれは、デ・アンジェリスの考察が、その好む表現でいえば——現在にかぎっていえば——よりon the groundであること、である。つまりそれは、萌芽状態である願望と矛盾で沸騰する現場を一つの思考の実験の場としているのであって、模索による蛇行をくり広げながら、地熱のように新しい実践的で知的な生産の淵源になりつつある動きをより直接に映し出しているということである。

(酒井隆史)

このZINEは本来、アントニオ・ネグリの来日を「歓待」すべく準備されていたものである。
[VOL] 編集委員会、および編集・製作者一同は、今回の日本政府による来日妨害を強く弾劾する。



VOL
3.29 2008 N°.01
ANTI G8 MOVEMENTS Issue
Sixteen pages

Anti-G8 Movement
-- A New Struggle Against
the Global Governance
Go Hirasawa, Sabu

From Movement To Society
Massimo De Angelis

Publishing: VOL members of editorial board